

宮崎県立西都原考古博物館 中期運営ビジョン評価表(平成27年度)

評価欄の数値は4段階評価

内部評価 4・・・達成できた 3・・・ほぼ達成できた 2・・・あまり達成できなかった 1・・・達成できなかった

外部評価 4・・・期待以上できた 3・・・ほぼ期待どおり 2・・・やや期待を下回る 1・・・改善が必要

(1) 調査研究

項目	評価指標	目標値	27年度実績	内部評価		外部評価	
				評価内容及び改善策		個別	総合
調査研究	論文等の執筆、研究発表等	年1回以上	各人、年に1回以上の執筆、発表を行った	<ul style="list-style-type: none"> 東 論文等13本 発表等4回 沖野 論文等5本 発表等1回 堀田 論文等3本 発表等3回 藤木 論文等9本 発表等8回 田中 論文等1本 発表等0回 永友 論文等1本 発表等2回 <p>○学芸普及担当職員の担当業務や専門分野に沿って、学会や研究会等での研究発表や研究論文を執筆することができた。</p> <p>○その一部は、本館発行の研究紀要第12号や、県教育委員会の西都原古墳群発掘調査・保存整備報告書に掲載することができた。</p> <p>※今後も国内外の研究者と積極的に交流しながら、研究協力体制を強化し、本館の展示や古墳群整備等に活かしていきたい。</p>	—	4	<p>・調査研究については、多くの職員の方が複数回取り組まれることにより、職員全体の資質向上とともに館の広報活動にも大いに生かされており、すばらしい取組だと思う。</p> <p>・各専門分野での継続的な研究、論文執筆、発表等のためには、ある程度の年数も必要(人事面も含めて)と思う。諸々の業務等も抱えながらの研究、論文執筆になると思う。</p> <p>・国際的な研究交流は、現在は台湾との交流が主であるが、この努力を評価したい。将来的には、国交関係が改善されれば、中国や他の諸国との交流も期待できる。</p> <p>・調査研究は、その活動が展示や史跡整備にフィードバックすることで博物館の成長・発展の原動力となるもの、古代生活体験に関するメニューの開発や指導法の改善になるもの、本県考古学研究を牽引するものなどである(ビジョン4ページ)。したがって、博物館を紹介する文章・報告は、情報発信もしくは普及の活動であって、調査研究にはあてはまらない。内部評価の(1)調査研究の欄に、「論文等・発表等」として本数・回数を掲載してある。この数は、「年報2015年度」22ページ以下の「研究・活動等」のすべての数字であるが、タイトルや掲載誌を見ると、中に情報発信もしくは普及の活動が複数含まれている。調査研究活動の成果と、情報発信活動の成果は、分けて掲載する必要がある。(「年報」においても同様)。具体的には、(4)情報発信の欄に、普及活動にかかわる原稿や発表の数を掲載してもよいと思う。</p> <p>博物館の紹介は大切な仕事であり、立派な業績でもある。一方で本館は、考古学専門の博物館として、研究を重要な活動の一環としている。そうであればこそ調査研究の成果と情報発信活動の成果を分別して扱うことが、本館の調査研究活動の信頼性を高めることにつながると思う。</p> <p>・多忙な日々の業務をこなしながら、多くの研究業績を達成されていることに敬意を表す。</p>

(2) 収集保存

項目	評価指標	目標値	27年度実績	内部評価		外部評価	
				評価内容及び改善策		個別	総合
鉄製品(古人骨・土器・石器等)	保存処理件数	年50件以上(※外部委託を含める)	58件	<ul style="list-style-type: none"> 鉄製品 内部処理 55点、外部委託処理 3点 計 58点 <p>○鉄製品については、本館の保存処理機能を活かして、緊急性の高いものから保存処理を進めることができた。</p> <p>○古人骨に関しては、長崎大学医学部からの移管資料の整理等を進めることができた。</p> <p>○土器・石器に関しては、旧資料館・総合博物館からの移管分の整理をすすめ、コンテナ毎のリスト化を進めることができた。</p> <p>※資料のデータベース化については、鉄製品・古人骨では完了しているが、土器・石器ではその資料の膨大さ故に、コンテナ単位での登録のみである。今後は、資料毎のデータベース登録を進める必要がある。</p>	4	4	<p>・収集保存の「図書登録数…800件(3月末現在)」とある。しかし「年報」8ページには、「2015年度は寄贈746冊によって」とあり、800ではない。どちらが正しいのか。なお、内部評価の平成27年度実績の図書・写真等の数値も連動してくる。</p> <p>・図書の収集は寄贈のみとなっている。しかし、調査研究活動には、専門書を新規に購入することが不可欠である。県立図書館に隣接する県総合博物館とは立地が異なるので、年間の専門図書の購入費を計上することを検討してはどうか。あるいは、そのために外部資金の導入に積極的に取り組むのも一策と思う。</p>
図書・写真等	収集、分類、登録件数	年1,000件以上	1,587件	<ul style="list-style-type: none"> 図書登録数・・・800件(3月末現在) 写真登録数・・・787件(3月末現在) 図書・写真等登録数 総計 1,587件 <p>○本館所蔵の図書、写真等の整理を行い、外部からの貸出依頼に迅速に対応できるようにした。</p> <p>※写真については、デジタル画像の数が膨大化しており、取捨選択を行い、活用しやすくする必要がある。全画像のデータベース化を進める必要がある。</p>	4		

(3) 展示

項目	評価指標	目標値	27年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策		個別	総合	
入館者数	年12万人	年12万人	113,306人	<p>①企画展Ⅰ「文字が伝えたもの ～宮崎県出土考古資料にみる文字と心～」 【2015/04/25～2015/06/21 入場者数 17,926人】 ○本県及び南九州地域の土器や木簡等に残る文字資料から当時の生活や風習、支配体制などを紹介することができた。 ●4月下旬から6月下旬の開催であり観光適期であったが、昨年度同期と比べ来館者数が減った。</p> <p>②コレクションギャラリー展Ⅰ…「西都原の勾玉は、何を語るのか」 館蔵資料の古墳時代の玉類を紹介し、勾玉の持つ魅力について紹介した。 【2015/06/26～2015/07/12 入場者数 3,790人】</p>		—	3	<p>・「生目・西都原・新田原」の特別展では、南九州を代表する3つの古墳群を比較することによって、南九州の古墳時代の変遷や特徴をとらえることができた。入場者数も多く、宣伝効果は大きい。 今後、「南九州の古墳文化」の世界文化遺産登録を目指すためにも、調査研究や情報発信の拠点となることを期待したい。</p> <p>・企画展Ⅰの開催期間が観光適期であったにもかかわらず、入館者数が昨年度より減少していることについては、その要因等を明確にし、次年度への対応に生かすことが大切だと思う。</p> <p>・企画展・コレクションギャラリー・特別展等の入館者数が記載されているが、その数の持つ意味が明確になるためにも、例えば、前年度との比較等が必要ではないか。入館者数等によって、市民や県民がどのような展示内容に興味関心等をもつのかを把握できれば、次年度の展示内容や入館者増のためのアイデアの足掛かりになるかもしれない。 難しいかもしれないが、企画展等では、視覚・聴覚に訴えるものに加え、触れる・つくる等の体験場が少しでも設定されれば、入館者は当時の生活等をより身近に感じるのかもしれない。</p>
特別展実施回数	年1回	年1回	1回	<p>③特別展「生目・西都原・新田原 ～日向における古墳時代の首長墓系譜を読む～」 【2015/07/18～2015/09/13 入場者数 16,945人】 ○南九州でも著名な古墳群でありながら未だ不明な点が多いことや、それぞれの古墳群の変遷を比較することで南九州全体の関係性が読み取れることを示すことができた。</p> <p>④コレクションギャラリー展Ⅱ…「土器に残された縄文の編みと織りの技」 古代における植物利用の一形態としての組織痕土器を紹介し、国際交流展への橋渡しとした。 【2015/09/15～2015/09/26 入場者数 4,357人】</p>				<p>・入館者数が目標値に若干達してはいないが、十分だと考える。西都原は遠いというイメージがあるので、例えば、菜の花や桜の季節に女性をターゲットにした展示を工夫することもよいかと思う。また、展示物の関係で照明が暗くしてあると思うが、もっと明るい見学者の気持ちも軽くなり、緊張感がなくなる気がする。</p>
国際交流展実施回数	年1回	年1回	1回	<p>⑤国際交流展「美と技と祈り～台湾原住民の植物利用と南九州人の軽石利用～」 【2015/10/03～2015/11/29 入場者数 22,245人】 ○台湾十三行博物館との共同開催であり、人形探しゲームや民族衣装の試着など、これまではなかった遊びの要素を取り入れるなどの試みを行った。昨年同期よりも来館者が増加した。</p> <p>⑥コレクションギャラリー展Ⅲ…「古墳時代の船形埴輪」 西都原古墳群出土の船形埴輪を素材に、多角的な視点で資料を観察する考古学の思考を提示した。 【2015/12/05～2016/01/11 入場者数 5,322人】</p>				<p>・評価については、3でよいと思う。台湾十三行博物館での西都原の特別展は約2ヶ月間で、97,599人と非常に入館者も多く、大成功の特別展であったと評価してよいと思うが、今後も台湾十三行博物館での特別展開催の予定はあるのか。</p> <p>・県内出土の考古資料を題材とした企画展や展示会は、今後も継続的な開催を期待したい。</p> <p>・特別展「生目・西都原・新田原」において、展示も地域に根差すものであり、興味深かった。また、解説も史実と自己の解説等を明確に区別しわかり易かった。</p>
企画展実施回数	年2回	年2回	2回	<p>⑦企画展Ⅱ「それは何を運んだのか ～古墳時代のフネ・舟・船～」 【2016/01/16～2016/03/21 入場者数 14,950人】 ○2005年に実施された古代船復元実験航海のビデオを紹介したり、復元船の実物大の大きさを体感できるように展示を工夫した。昨年同期よりも来館者は増加した。</p> <p>⑧コレクションギャラリー展Ⅳ…「日向の駒」 県内出土の馬具や馬の紹介を行いつつ、次期開催テーマの「塩」に繋げるための展示を行った。 【2016/03/26～2016/04/17 入場者数 9,815人】</p>				<p>・考古学の分野で陥りやすい「出土品・保存物の死蔵や、収蔵物の形状・形式の記録偏重主義」を脱して、それらと人間生活との関わりを重視した、研究・展示の方向性は評価できる。（例：企画展のキャッチフレーズ「文字が伝えたもの」「それは何を運んだのか」など）</p> <p>・展示の末尾の平成27年度実績の入館者数は、113,306人とあるが、「年報」7ページでは、古代生活体験館を含めて、112,740人とあり、一致していないように見える。</p> <p>・開館から韓国との交流展が多いと思っていたが、昨年度は台湾との交流で、原住民の衣技術に関する企画展がなされたことは評価できる。</p>
コレクションギャラリー展実施回数	年3回	年3回	4回	<p>○海外では初めてとなる台湾新北市立十三行博物館において「晴天之国、神話之郷、日本宮崎県立西都原考古博物館収蔵品文物特展」を実施することができた。期間は1月13日から3月13日までの2ヶ月間で入場者数は、97,599人であった。 ○年間を通し本県、南九州、東アジアと視点を広げながら、企画展、特別展、国際交流展を実施することができた。コレクションギャラリー展は次期展示会の予告という役割を持たせ、4回実施することができた。</p> <p>※開館10周年記念の特別展を実施した昨年度の反動のように、上半期は来館者が減少したが、下半期は前年同期よりも増加傾向が見られた。今後も来館者の更なる探究心を誘うために、最新の研究成果に対応した展示を行ってきたい。</p>				<p>・宮崎県の考古博物館という立場から、日本ないし本県の衣関係の出土物展示とか、麻や絹を衣類に使用する以前、シナノキや梶の木などの樹木の皮やイラクサ・カラムシ・アカソ・藤・葛など草木の皮の繊維を取り出して布を織っていたことなど、台湾原住民の伝統技術だけではなく、日本や宮崎との関連で展示ないし解説すれば、もっと関心が高まったのではないかと思う。例えば、カラムシで織った越後上布は上質な織物として名高い。</p> <p>・やや多忙すぎる感あり。コレクションギャラリーの場合、手作りのパンフレットなどを用意されたいかがでしょうか。</p>

(4) 情報発信

項目	評価指標	目標値	27年度実績	内部評価		外部評価	
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見
報道機関への情報提供回数	年12回以上	年12回以上	年25回以上	<ul style="list-style-type: none"> 報道機関への情報提供 展示会（年4回）、講演会・考古博講座（年8回）、体験実験講座（年7回）の報道機関へのプレスリリースをした。そのほか、本年度の事業（古代復元住居再生事業）、考古博少年団の行事等についても実施した。 県広報誌・新聞社・情報誌等への毎月の情報提供を行った。 博物館ホームページの更新回数 展示会（年4回）、講演会・考古博講座（年8回）、体験実験講座（年7回）の情報、コラム（毎月）、本年度事業（古代復元住居再生事業）、考古博少年団の活動報告などを適宜更新した。月平均5回程度。 			<ul style="list-style-type: none"> 広告PRに係る予算が削減される中、今後とも、諸々の媒体・機会等を利用した継続的、地道な広報活動に取り組んでいただきたい。平成27年度の10月から3月のMRTラジオでの「歴史ロマン〜」コーナーは、広報活動としても効果があったのではないかとと思う。 限られた予算の中で、マスコミ、ホームページなど広報手段・媒体を十分活用して、情報発信に努めている。今後は、館として、職員として、NPO法人として、SNSなどの積極的な活用をお願いしたい。
博物館ホームページ更新回数	月2回以上	月2回以上	月平均5回以上	<ul style="list-style-type: none"> ○平成27年度は広報PR事業の一環として、10月から3月までの毎週水曜日、MRTラジオにおいて「歴史ロマンを求めて 考古学の旅」というコーナーを設けた。全26回のシリーズで学芸普及担当職員が出演し、考古学の楽しさや考古博の魅力を発信した。ラジオを聞いて来館したという方々も見られた。 ○テレビ・ラジオに加え、観光や旅行雑誌等の取材を積極的に受け入れ、様々な情報媒体で紹介されるようになった。 ●テレビCMを秋と冬の展示会前に放映したが費用対効果の面で疑問が残った。 ※広告PR等に係る予算は激減している。今後はプレスリリースの量と質を高めることで、経費をかけずにPR効果の期待できる方法を探っていきたい。 	—	4	

(5) 教育普及

項目	評価指標	目標値	27年度実績	内部評価		外部評価	
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見
生涯学習の一環としての教育普及活動				<ul style="list-style-type: none"> 講演会・講座等の実施回数 ・講演会・・・2回（8月、10月） ・考古博講座・・・5回（5月、8月、11月、2月、3月） ・体験・実験講座・・・9回（5月、7月、8月、9月、10月、12月、1月、2月） 団体予約件数 ・404件 ○多様な団体から利用予約が増加している。 ○昨年に比べ講演会・講座の回数は減ったものの、事前の問合せ等は増えており、関心の高さが感じられる。 ●土器や埴輪の野焼きなど天候に左右される場合があり、延期や中止となったものもあった。 ※雨天時の代替案なども用意する必要がある。 			<ul style="list-style-type: none"> ・市内の全小学校で利用させていただいているが、子どもたちにとって貴重な文化財に親しむための機会となっている。各学校の引率の教諭たちは、職員やボランティアの方々のわかりやすい説明で、子どもたちの課題解決へ大いに役立ったという意見を述べている。 ・学校現場への積極的な開放に心から感謝する。 ・学校教育との連携については、各市町村教育委員会を訪問するなど、大変ご苦労されていると感じた。立場が違うかもしれないが、鹿児島県上野原縄文の森は、宮崎県内の小学校を訪問され、修学旅行の誘致を行われている。西都原古墳群や考古博物館ともに宮崎が誇る財産なので、県外にさらにアピールできたらいいと思う。 ・天候に左右される行事など、可能な限り、「雨天の場合は、室内で〇〇等を実施します。その際の参加の有無…」も、最初の参加回答に設けてはどうか。両方の準備は大変だとは思いますが。 ・ボランティアガイド育成・博物館実習（大学単位制度）・インターンシップなどについて努力されている。一歩進んで、博物館実習や県内高校生のインターン実習などについて、西都原考古博物館としての特別の配慮（他県などに例のない、受け入れ態勢の優遇）などが出来ないものか？施設環境に比較的余裕があり、また、博物館周辺が考古学フィールドであるという絶好の条件を生かした取り組みができないものか。施設見学やインターンシップを経験した県内の小学生～大学生を育成して、将来的に研究者や、当博物館の館員となることを志すような育成・普及制度が企画できないものか。 ・教育普及の「生涯学習」の「体験・実験講座」について、9回とし、そのなかに7月開催もある。「年報」14ページの「(2) 体験・実験講座」は全7回で、7月がない。7月は「年報」同ページの「(3) その他の講座」の7月25日と7月28日を指すものと思われる。しかし、内部評価では「学校教育との連携」にも、これら7月の講座をカウントしている。したがって現状では、二重に数えている。「生涯学習」の方で、昨年に比べ講座回数が増えたと記している背景からすると、数を稼ごうとしているのではないかと疑われかねないので、避けた方がよいと思う。
学校教育との連携	講演会・講座の実施回数	年15回以上	年18回	<ul style="list-style-type: none"> 講座の実施回数 ・教員対象講座・・・1回（7月） ・小中学生対象講座・・・1回（7月） 考古博物館少年団 ・年間8回の取り組み（本年度は、土器づくり名人をめざした活動） 学校予約件数 ・145件 ○本館の紹介と遠足等での利用を促すため、全市町村教育委員会（25）と中等教育・県立学校（50）を訪問した。 ○考古学や社会科等に限らず、英語の弁論大会や理科の実験教室、教員対象の研究会等での活用も増えてきている。 ○西都・児湯地域では、土日の学級レクレーション等の利用も増えてきている。 	—	4	

(6) 経営

項目	評価指標	目標値	27年度実績	内部評価		外部評価	
				評価内容及び改善策		評価・意見	
				個別	総合		
県民等からの意見の反映				○1年を通してアンケートを実施している。中でも毎年11月中旬から12月中旬の1ヶ月間はアンケート月間として実施している。今年度は、多くの方に記入していただけるよう、総合受付にてアンケート用紙を配付し、1階及び地下展示室出口の2箇所に記入場所を設置した。その甲斐あって、昨年より倍以上のアンケートの回収ができた。 ●アンケートの記載内容を見ると概ね好評であったが、中には改善を要望する意見もあった。このため、対応可能な要望については迅速に対応を行った。	3		・危機管理意識の高揚に意欲的に取り組まれていることに感心している。 ・西都原考古博物館は絶好の拠点に立地し、展示施設にありがちな喧騒がないことから、集中した閲覧が可能となっている。しかし、これを生み出している立地条件が、却って、来館者の伸び悩みにつながり、二律背反現象となっている。 永年経営上の不利として指摘されていた公共交通機関（バス等）の脆弱性も、宮崎市内からの直通バスの運行が実現し、すでに3年間を超えた。しかしこのことが県民に親しく届いているとはあまり受けとれない。県の総合的な文化行政として、何か欠けているのではないかと懸念している。
県民等との協働				○毎月1～2回程度、本館職員及びNPO（iさいと）職員がメンバーとなり、魅力増進検討委員会を設置し、古代生活体験館における体験メニューの見直しや開発等を検討した。 ○NPO(iさいと)には本館の運営支援業務を委託しているが、本館職員と緊密に連絡を取りながらボランティアガイドの募集や研修・講座（新人研修、展示解説マニュアル活用講座、県内外視察研修）、体験館プログラムの作成、団体受入れ業務等を実施した。 ○本館が行っている「蘇れ！古代ロマン復元住居再生事業」では、NPO(iさいと)のコーディネートによる県民等と協働して復元住居の再生を行った。 ※平成28年度も本館とNPO法人が協働して、来館者の満足度向上を図るよう取り組んでいきたい。	3		・「職員の資質向上」のなかに、「9月に全職員による奉仕活動を行い、本館周辺の除草作業を実施した。」とあるが、これは資質向上ではなく、「施設・設備の管理」ではないか。 ・「職員の資質向上」のなかに、「本館の広報事業の一つに毎週水曜日にMRTラジオ出演があり・・・ラジオ出演を聞いて来館したというお客様も増えてきた」とあるが、これも「職員の資質向上」に入れるのは疑問である。すでに掲載しておられるとおり、(4)情報発信が妥当である。なお、「わかりやすく解説するように工夫」という点については、むしろ普及の活動ではないか。学芸員の資質の向上とは何か、どのような姿が資質の高い学芸員なのか、質（クオリティ）について検討されてもよいかもしれない。たとえば学芸員が競争的資金を獲得してくることは、県外の審査員から認められることであり、一定の基準になると考える。
職員の資質向上				○全職員を対象にコンプライアンス、危機管理、人権研修、交通安全（4年連続無事故無違反を継続中）、環境保全、情報セキュリティ研修等を実施した。 ○毎月1回、職員全体会を実施し、各職員の業務の懸案事項を作成、毎月の進捗状況を発表することにより、課題等の共通理解を図った。 ○県消防学校での消火・避難誘導訓練の研修及び普通救命講習（AEDや応急処置方法）の受講に参加した。 ○古代復元住居の再生にあたり、茅葺き屋根の老朽化に伴う屋根の改修を27・28年度に11回実施するが、27年度の内容である茅や檜の材料調達作業に、職員も交替で全員参加した。 ○本館の広報事業の一つに毎週水曜日にMRTラジオ出演があり、学芸普及担当が交替でテーマに沿った話しをする。本館を全く知らないリスナーや、考古学に対して敷居の高さを感じていたリスナーに向け、少しでも興味を持ってもらうよう、専門的知識をわかりやすく解説するように、工夫しながら原稿の作成、出演を行った。ラジオ出演を聞いて来館したというお客様も増えてきた。 ○9月に全職員による奉仕活動を行い、本館周辺の除草作業を実施した。 ※平成28年度においても研修等の機会を確保し、全職員の資質向上を図っていく。	4	3	<全体的な評価・意見> ・中期ビジョンに則って計画的に実践されており、昨年以上の実績をあげられている。 ・学芸員の意識の高さを感じ、その意識や熱意が展示企画展などの創意工夫に表れていると痛感している。 ・目標値に対して、入館者数の実績を除くと、ほとんどの項目の実績が上回っている（目標達成ができていない）ことはすばらしいと思う。 児童の体験活動も毎年行っているが、満足度が高く、飽きさせない説明や資料の展示をしてくださるのでありがたい。ボランティアの方の説明も丁寧でわかりやすい。いつも思うことだが、交通手段がもう少しあればと残念である。 ・年間を通して実施しているアンケートは、来館者と博物館を結ぶ重要なツールであり、その十分な分析活用により、何度でも利用者を感じさせ、わくわくさせる館の運営を期待している。
危機管理体制の強化				○全職員（県職員、NPO、ボランティア、委託業者）が参加し、2月に例年の消火訓練に、今年度は地震や火災に備えた避難誘導訓練を加えた防災総合訓練を西都市消防本部職員が立ち会いの下、実施した。また、訓練後は、消火器・消火栓を使用した消火活動の実地研修を実施した。なお、同訓練にあたっては、11月に職員4名で県消防学校での避難誘導・消火における訓練研修に参加し、訓練当日は率先して行動にあたった。 ○7月には副館長の指導のもと、危機管理職場研修を実施し、災害時における職員の対応について研修を深めた。 ○11月には南海トラフ巨大地震を想定した県民一斉防災行動訓練に参加し、本館内で「まず姿勢を低く、頭を守り、動かない」安全確保行動を実施した。 ○11月に職員3名が県が主催する普通救命講習を受講し、AEDの使用方法や応急手当の方法について学んだ。 以上の訓練や研修・講習を通じて職員の防災・避難誘導・救護に対する意識の高揚を図った。	4		・県財政にゆとりがなく、予算・人員配置等、十分でない現状下、低予算で活動度をあげる方法として、館員の資質向上がある。その最も効果的なものは、研修旅行・留学である。研修の便を可能な限り提供することが望ましい。 ・西都原考古博物館では評価活動は今回が初めてであり、試行錯誤であったことと推察している。今後、より向上できるための評価活動のあり方を工夫していかれることを希望する。 ・職員の方々の調査研究、収集保存、教育普及などへの努力と企画力は十分に評価できる。おそらく最も問題になるのは来館者数であろうが、アクセスの不便さを逆手に取り、古代遺跡に隣接するというロケーションを十分に生かした企画を期待したい。例えば、都会の混雑を考えると、人が少ないということも贅沢の一つに思われる。
施設・設備の管理				○開館から12年が経過し、施設・設備の老朽化が顕著となっているが、莫大な経費がかかるため、県営繕課と協議しながら策定している建物保全計画などを活用し、老朽化の進行を遅延させる措置として、小規模な修繕・改修での対応を行っている。平成27年度は本館の空調機器の心臓部である空冷チラーの部品修繕を行った。 ○来館者用トイレの洋式便座にウォシュレット機能を設置した。 ※今後も、財政事情に応じて早め早めの修繕・改修を行い、来館者のサービスが低減しないよう対応していきたい。	3		<総合評価> 3.62